問　題　訂　正

教科：　国語　　（　文・教・経　学部）

問題冊子に，次のとおり訂正があります。

問題訂正

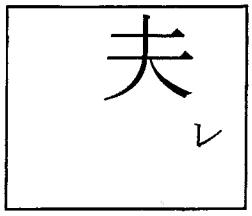
・科目名：国語

・問題冊子　13　ページ

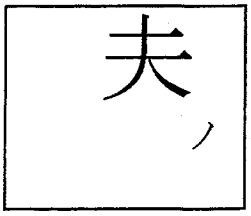
・問題番号：問題　三

・問題文の　はじめ　から　4　行目　行末から２文字目

（誤）



（正）



一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、
著作権の都合により公開いたしません。

（市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』による）

【注】 ○ジビエ――狩猟によって捕獲し食用にする野生の鳥獣。猪・鹿・野うさぎ・鴨など。またその肉。

問一　傍線部a～jのカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二　傍線部①「動物の肉を食べること」について、近年どのような問題が指摘されているか、本文に即して四〇字以内でまとめよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問三　傍線部②において、筆者が「少し不思議」と述べるのはなぜか、その理由を本文に即して五〇字以内で説明せよ（句読点・かっこ類も字数に含める）。

問四　傍線部③「大成功した共感能力」とあるが、筆者はどのような点から「大成功」と述べるのか、本文に即して九〇字以内で説明せよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問五　傍線部④「いったいどこまで進むのでしょうか」とあるが、筆者は生物としての人間のどのような傾向がどこまで進むと考えているか、本文全体をふまえて一二〇字以内でまとめよ(句読点・かっこ類も字数に含める)。

問六　次のア～カの記述のうち、本文の内容に合致するものをすべて選び、記号で答えよ。

ア　他の人間へのやさしさは、私たち人間の生物としての繁栄に貢献し、世代とともに強化されてきた。

イ　近い将来、人間は動物食をやめ、植物由来のタンパク質を加工して作る高栄養の人工肉を食べなければならない。

ウ　ウシのゲップに含まれるメタンを無害化する技術を開発して環境への負荷を解消することが急務となっている。

エ　昆虫は温かな体温を持たず、体のつくりも人間に似ているとはいえないので人間が共感することはありえない。

オ　肉が食べられないような未来は嫌だが、付加価値の高い代替品ができるにちがいなく、深刻な問題にはならない。

カ　人間のやさしさの拡張傾向は、すべての生きものを殺してはならぬというブッダの教えに始まる。

二

次の文章は、『信生法師日記』の一節である。作者信生は、鎌倉時代前期の武家歌人で、将軍実朝の死後、京で出家した。鎌倉での実朝七回忌供養の後、作者は、信濃国(現在の長野県)の善光寺に参詣する途中、近くに住む旧友を訪ねる。これを読んで、後の問に答えよ。

君に仕へし昔は、和歌の浦波同じ身に立ち交じり、かく世を逃れぬる今は、朝倉山の雲となりぬる人、伊賀式部光宗、谷の苧環の埋づもれて、姨捨山のほとりに住むことあり。沈むらむ心のうちもいとほしう、かかる折こそ心の情はと思ひてまかるに、その所にたづね至りて見れば、あやしげなる萱屋の、昔のありさま思ひ出づるに、門のほとりにある男、いかなる乞食やらむと思ひつるさまにて、(ア)かくとは思ひ寄りげなきに、見知りたる男出で来て、急ぎ入りて、かくと言へりければ、主出で、かたち驚けるさまにて出で会ひたり。まづ涙のみ先立ちて落ち、出づべき言もおぼえず。主、「かかる古屋の内にて、短き春の夜も明かし難う、秋の日も暮らし難くて、思ひ過ぐす心の内、ただ思しやれ。(イ)身に添ふ物とては、昔の面影も、今はましていかでかと思ひつるに、憂きにたへたる命のつらさも、今こそ嬉しうなむ」と言ふ。まことにさこそは、とあはれに推しはかる。幼き子の、かかることも思ひも知らず、まつはり遊ぶに、涙ぐみつつ、(ウ)「同じさまにて、立ちも出でぬべき心地してうらやましけれど、この身にて、世の恐れも多く、また、かかるほだしさへ振り捨て難くて」、心の闇はさこそまどふらめ、とあはれなり。命あらばとて、後会を頼めて出でて、月隈なく侍りしに、その辺近き所より申しつかはす。

おほかたも慰めかぬる山里に独りや見つる姨捨の月

返し、

(A)物思ふ心の闇の晴れぬには見るかひもなし姨捨の月

この人、善光寺へ追うてつかはす。かの式部こもりゐ侍る所をば、麻績となむ申し侍る。

(B)忘れずはまたも来て訪へ小忌衣見しにもあらぬ袂なりとも

返し、

たちかへりまたもたづねむ小忌衣かくてはいかが山藍（やまあゐ）の袖

【注】○君――源実朝。鎌倉幕府三代将軍。　○和歌の浦――紀伊国（現在の和歌山県）の海岸。ここでは和歌の道、の意。
○朝倉山の雲――「昔見し人をぞ我はよそに見じ朝倉山の雲のはるかに」（夫木和歌抄・雑二）を踏まえる。「朝倉山」は、筑前国（現在の福岡県）の山。
○伊賀式部光宗――信生の旧友。幕府への謀反に関わり、信濃国に流された。　○苧環――枝も葉もない立木。
○姨捨山――信濃国の山。「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（古今集・雑上・詠み人知らず）にも詠まれた月の名所。「更級」は姨捨山付近の一帯。
○心の闇――「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（後撰集・雑一・藤原兼輔）による。
○小忌衣――大嘗祭・新嘗祭の際に、神事に奉仕する者が着用する衣。
○山藍――トウダイグサ科の多年草。葉の藍色の汁で、小忌衣に模様を摺る。

問一　傍線部（ア）～（ウ）を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問二　和歌（A）および（B）を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問三　次の文章は、鎌倉時代の旅と文学について述べたものである。空欄①および②に入るべき作品名を答えよ。

鎌倉に幕府が開かれたことで、都と地方の往来が活発となり、交通が発達した。その結果、『信生法師日記』や『海道記』『東関紀行』などの旅日記、紀行文も多く書かれることになった。阿仏尼の［①］は、所領をめぐる訴訟のために京都から鎌倉に下向した際の記録である。また、後深草院に仕えた二条は、晩年、尼になって旅を続けるが、その様子は［②］に記されている。

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

蟹、水族之微者。蟹始窟レ穴於二沮洳中一、秋冬ノ交必大出。江東ノ人云、稲之登也、率執二一穂一以朝二其ノ魁一、然後従二其ノ所レ之。蚤夜孱沸、指レ江而奔。漁者緯レ蕭承二其ノ流一而障レ之。曰二蟹断一、断二其ノ江一之道一焉爾。[1] 然後攀援越軼、遯而去者十六七。[2] 既入二於江一、則形質浸大二於旧一。[3] 自レ江復趨二於海一、如二江之状一、漁者又断而求レ之。[4] 其ノ越軼遯去者又加レ多焉。既入二於海一、形質益大。海人亦異二其ノ称一矣。

嗚呼、穂而朝二其ノ魁一、不レ近二於義一耶。捨二沮洳一而之二江海一、自レ微而務レ著、不レ近二於智一耶。

今之学者、始得二百家小説一、而不レ知二孟軻・荀・揚氏之道一。[a] 或知レ

之、又不汲汲於聖人之言、求大中之要、何也。百家小説、沮洳也。孟軻・荀・揚氏、聖人之瀆也。六籍者、聖人之海也。荀b不能下捨沮洳而求瀆、由瀆以至於海、是人之智反出於水虫下、能不悲c夫。吾是以志夫蟹。

（陸亀蒙「蟹志」による）

【注】○沮洳――湿地。　○江東――長江下流の南岸の地域。
○魁――リーダー。ここでは蟹の集団の中の先導者を指す。　○蚤夜――蚤は早に同じ。朝から晩まで。
○臀沸――わきでるさま。　○攀援――よじのぼる。　○越軼――のり越える。
○浸――ようやく。次第に。
○孟軻荀揚――孟軻は孟子、荀は荀子、揚は揚雄、それぞれ戦国時代から漢代にかけての儒学者の名。
○汲汲――一つの事を一心に求めるさま。　○大中――中正の道。　○瀆――大きな川。
○六籍――六経に同じ。儒家の経典六種。『詩経』『書経』『礼経』『楽経』『易経』『春秋』のこと。

問一　波線部a「或」b「苟」c「夫」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二　傍線部1「蟹断」について本文に即して説明せよ。「断」の字の意味も含めて説明すること。

問三　傍線部2「然後攀援越軼、遯而去者十六七」を現代語訳せよ。

問四　傍線部3「形質浸大二於旧一」を書き下し文にせよ。

問五　傍線部4「如二江之状一」とはどういうことか説明せよ。

問六　傍線部5「是人之智反出二於水虫下一」について、人の智はなぜ水虫より下だとなるのか、本文の主旨に沿って一五〇字以内で説明せよ（句読点も字数に含める）。